

V 新生児外科的疾患に関する総合的研究

—昭和60年度研究業績—

分担研究者

秋山 洋 (鹿児島大学附属病院小児外科)

研究協力者 (順不同)

中條 俊 夫 (東京大学附属病院小児外科)
高橋 英 世 (千葉大学附属病院小児外科)
岩 渕 眞 (新潟大学附属病院小児外科)
岡 田 正 (大阪大学附属病院小児外科)
矢野 博 道 (久留米大学小児外科)
伊藤 喬 広 (名古屋大学分院外科)
平井 慶 徳 (順天堂大学小児外科)
遠藤 昌 夫 (慶応義塾大学外科)
石田 治 雄 (東京都立清瀬小児病院外科)
西 寿 治 (神奈川県立こども医療センター外科)
佐伯 守 洋 (国立小児病院外科)
土田 嘉 昭 (国立小児病院外科)
河野 澄 男 (静岡県立こども病院新生児, 未熟児外科)
長屋 昌 宏 (愛知県心身障害者コロニー小児外科)
永田 祥 代 (福岡市立こども病院外科)
三川 宏 (国立小児病院麻酔科)
田宮 恵 子 (北海道立小児総合保健センター)
鈴木 玄 一 (東京都立清瀬小児病院麻酔科)
常本 実 (国立小児病院心臓血管外科)
今井 康 晴 (東京女子医科大学心研循環器小児外科)
八木原 俊 克 (国立循環器センター心臓外科)
山口 眞 弘 (兵庫県立こども病院胸部外科)

新生児外科が、わが国において定着してからすでに10数年が経過し、非重症例や成熟児における手術成績は良好となってきた。しかし、呼吸管理、抗ショック療法、長期経静脈栄養等の supporting therapy の進歩によって、重症例の救命率も増加の傾向を示している。新生児外科の最終的目的は、そのままの状態では生命を維持していけない先天性疾患に対して手術を行ない、社会生活を行ない得る成人にまで発育させることである。しかし、この最終目的を果たすことはかならずしも容易ではない。とくに、先に述べたような supporting therapy を必要とする重症例の救命率は、非重症例の患児に比し良好とは言えず、しかも重症例の長期予後についてはいまだ不明の点も少なくない。

この研究においては、特に重症新生児外科的疾患の救命率向上、あるいは予後調査を行ない、新生児外科の最終目的を果たすことにある。近年、出生率の減少と新生児外科を取り扱う施設の増加にともない、一施設で取り扱われる症例が減少していることもあり、意とした研究成果を得るために、多くの施設に研究協力者として参加をお願いした。

昭和59年度における研究として長期高カロリー輸液の施行上の問題点、経腸栄養の開発、消化管穿孔を中心とした抗ショック療法における種々の問題、未熟児の術中術後管理、特定疾患の予後、極小未熟児の遠隔成績等の諸問題を明らかにしてきた。なお、わが国において予後が悪いとされ、救命率の低かった新生児心大血管疾患における治療の現況、およびその手術成績の現況について明らかにしてきた。

昭和60年度における研究成果をまとめると、次のごとくなる。

1. 長期経静脈栄養症例の問題点と対策

新生児外科においては、一般消化管を中心とした疾患が多く、手術成功のために経静脈栄養を中心とする非経口栄養法の進歩によることが多い。経静脈栄養法は多くは外科側によって研究が進められ、とくに新生児症例については小児外科医によってその研究が進められてきた。現在小児科領域においても、この治療は応用されてきているが、外科的疾患においては長期化するものが少なくなく、それだけに問題点も少なくない。

この研究においては、30日以上経静脈栄養を行なった 226症例の遠隔成績を調査することにより、早期合併症の有無による差異、身体的発育、知能発達における影響等が明らかにされ、現在考えられる長期経静脈栄養管理上のマニュアル作製を行ない、新生児における長期経静脈栄養法施行時の注意点をまとめることができ、将来にとって意義深いものである。

2. 消化管穿孔を中心とした抗ショック療法

59年度の抗ショック療法に次いで、今回はエンドトキシンショックにおける血漿交換療法、術前腹膜灌流の研究成果に追加された。また、呼吸管理を含めた未熟児の全身管理の進歩が、この抗ショック療法の進歩につながったことが報告されている。しかし現在、59年度の結果からみて

も、その予後はいまだ満足しうるものとは言えず、現在考えられる消化管穿孔を中心とした抗ショック療法の術前、術中、術後を通じての管理基準を作製し得たことは大きな成果と言える。

3. 呼吸管理の進歩とその予後について

近年新生児外科の進歩をみたのは、この呼吸管理の進歩によることが多い。実際に新生児に用いられる呼吸器の開発、CPAP、PEEP、さらにはHFV (High frequency ventilation) 等の導入、血液ガスの monitoring の進歩によることが大きい。今回は、2週間以上気管内挿管による呼吸管理症例を集計することにより、その遠隔成績を調査した。症例は89例であり、長期経静脈栄養例よりは少ない。これは、新生児呼吸管理はかなりの症例におこなわれているものの、その多くは2週間以内の短期間に人工呼吸より離脱し得ていることによるものと思われる。勿論、人工呼吸が長期化するためには多くの因子が存在し、一概にまとめることは困難である。長期人工呼吸を必要とする疾患は、横隔膜ヘルニア、食道閉鎖症、消化管穿孔、腹壁異常等の疾患が多くみられているが、合併奇形等により長期人工呼吸を余儀なくされる例も少なくなく、救命率も必ずしも満足すべきものではなく、生存例の予後も身体的発育、知能面での発育からみて問題となる点も少なくないようであり、止むをえない面があるにしても、長期人工呼吸管理の面でのよりよい管理法の確立も必要と言える。

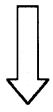
4. 未熟児、とくに極小未熟児の問題

新生児外科において未熟児の問題はさけて通れない問題の一つであり、未熟児、とくに極小未熟児の手術成績は現在不良と言わざるをえない。長屋が示しているように、疾患別にみると未熟児の多い疾患が存在し、未熟児の管理および極小未熟児の予後はかならずしも良好でないことは、すでに59年度の研究において報告されているが、管理面でのマニュアルを作製せんとしたが、いまだ症例数も少なく、時期早く行い得なかった。

5. 新生児心大血管外科

わが国における新生児心大血管外科は、ここ数年間に急速な進歩をとげ、救命例も増加の傾向を示している。とくに今回は、手術症例の遠隔調査が行なわれ、詳細の報告がみられる。いまだ follow up の期間は短くとは言え、遠隔成績も良好の結果が得られており、この分野の今後に期待することが大きい。

以上、昭和59年、60年度にわたり「新生児外科的疾患における総合的研究」をテーマに研究報告を行ってきたが、一般外科領域においては、とくに supporting therapy を必要とする重症例の諸問題にとり組み、心大血管外科領域においてはその現況と予後調査に重点をおき、研究成果を報告した。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



新生児外科が、わが国において定着してからすでに 10 数年が経過し、非重症例や成熟児における手術成績は良好となってきた。しかし、呼吸管理、抗ショック療法、長期経静脈栄養等の supporting therapy の進歩によって、重症例の救命率も増加の傾向を示している。新生児外科の最終的目的は、そのままの状態では生命を維持していけない先天性疾患に対して手術を行ない、社会生活を行ない得る成人にまで発育させることである。しかし、この最終目的を果たすことはかならずしも容易ではない。とくに、先に述べたような supporting therapy を必要とする重症例の救命率は、非重症例の患児に比し良好とは言えず、しかも重症例の長期予後についてはいまだ不明の点も少なくない。

この研究においては、特に重症新生児外科的疾患の救命率向上、あるいは予後調査を行ない、新生児外科の最終目的を果たすことにある。近年、出生率の減少と新生児外科を取り扱う施設の増加にともない、一施設で取り扱われる症例が減少していることもあり、意とした研究成果を得るために、多くの施設に研究協力者として参加をお願いした。

昭和 59 年度における研究として長期高カロリー輸液の施行上の問題点、経腸栄養の開発、消化管穿孔を中心とした抗ショック療法における種々の問題、未熟児の術中術後管理、特定疾患の予後、極小未熟児の遠隔成績等の諸問題を明らかにしてきた。なお、わが国において予後が悪いとされ、救命率の低かった新生児心大血管疾患における治療の現況、およびその手術成績の現況について明らかにしてきた。